

「境界」を跨いで〈東アジア〉作りへ

朴 裕 河

✉ parkyuh@sejong.ac.kr

「境界」とは何だろうか。今日東アジア地域では境界をめぐる対立が以前にもまして激になっている。たとえば日本と中国の間における尖閣列島をめぐる対立、日本と韓国との間における独島(竹島)をめぐる葛藤などがそれだ。そして、それぞれの国民は当たり前のようにそれらの境界を「守る」べきものと考え、必要ならば戦争さえも辞さないと考えているのが今日の現状だ。

しかし「境界」なるものが、根源的なものでもなく普遍的なものでもないことをわたしたちは歴史から学んできた。世の中にあまた存在する境界は、所詮そのつどの「中央の政治力」が及ぶ範囲にすぎず、実際はその地に住む人々には何の利害関係もないということ。境界とは所詮中央の集権エリートによる税金と兵力の徴収を可能にするものでしかないことを。政治力とはすなわち軍事力であり、近代以降のアジアの場合、日本がその「境界」線をより遠くへ引くべく、東南アジアや南太平洋まで軍隊を派遣していた。そしてアジアは「大日本帝国」として包摂されるか「敵」になって戦うかの運命を試された過去を持つようになったのである。

共同体のみんなを守るかのようにでありながら実際には中央権力を守るためのものに過ぎない言説に翻弄されながらアジアは対立し、また敵対させられてきた。そしてそのような言説に「文学」も服務してきたこともす

でに私たちは知っている。

文学は、「境界」をそれぞれの国民たちに想像させ、境界内の人と自然への「愛情」を育て、さらにそれを「守る」思想を植えつけ、守るためには死をさえ恐れるべきではないと教えてきた。特に近代は多かれ少なかれそのような思想を込めている文学が「ナショナルリテラチャー」として価値化され、キャンオンとなって国民に流布されてきた時代だった。しかし「美しい」とされたそのような思想が、同時に境界の外側にいる人々への想像力を貧困にし、いざとなったとき「殺している」存在としてきたのも20世紀だった。

そのような、近代の「国民文学」の問題が知られるにつれて「国民」の内外にはじかれた「マイノリティ」文学にも目が注がれるようになったのは幸いといえるだろう。またそのような認識さえ一般的になっていないのだから、まだまだ在日文学や沖縄文学、そして台湾や中国の少数民族文学は注目され、研究されるべきである。

しかし、そのような研究さえもいまだナショナルアイデンティティ信仰から自由ではないのではないだろうか。巨大な悪(民族性を圧殺する別の民族性)を告発するため、「境界」の内側と外側にすでにたくさんの混血と文化混交と言葉の混交があったことが忘れられ、隠蔽されてきたように思う。いわば、自分の中に刻まれている無数の境界に無頓着

だったともいえるだろう。そういう意味では、国家が確定した境界を跨ぐことは、自らの中に刻印されている境界を見つめなおすことから始めるべきなのかもしれない。近代国家が境界の外側の人々を殺していいと教えたように、自らの中のさまざまな痕跡のうち、ひとつだけを残してそこに自ら「同化」していったような、それぞれの〈歴史〉があるのだから。

そのような「痕跡」をもっとも目立つ形で残していた人たちは、おそらく、近代以降国家が引いた境界を「跨いで」みた人々であろう。たとえば在日朝鮮人であり、華僑であり、植民地や占領地に渡っていった日本人であり、そしてそのような〈移動〉の歴史が生んだ存在たちだ。内鮮一体結婚で生まれた人々、帰れずに残った日本人妻の子供たち、そして中国残留孤児のように引揚げの際北朝鮮に捨てられ売られながらいまだ忘れられたままの人々である。彼らは新たな文化や言葉を身体に刻まれながら、帝国の崩壊とともにその痕跡を消すことを要求された人々だった。たとえば韓国内の華僑はいまだに韓国では可視化されていない。

しかし、たとえば戦後日本で植民地支配がどういうものだったのかを、孤独に、しかし誰よりも熾烈に考えたのは、小林勝や村松武司などの、朝鮮で生まれた、ほかならぬ

そのような人々だった。彼らは物理的にのみならず心の中ですでに「境界」を跨いだ作家たちだった。

言うまでもなく物理的に「境界」を跨ぐことが必ずしも精神的に境界を跨いだことにはならず、そのようなケースもわたしたちは見てきた。そして境界をめぐる国家間対立がいまだ続くのは、跨ぐことがかえってナショナルアイデンティティの確認につながっていた者たちの言葉がそれぞれの社会に強力だからであろう。

ならば、いまこそ、境界を跨ぎつつも、その細い境界線の上にあえて留まりながら思考し続けた人々を見出すことが至急であるように思う。それはたとえばフェミニズム文学がそうだったように、過去のキャンオンを吟味しなおす作業であったり、埋もれた作家を見出す過程にもなるのだろう。そして彼らが見せてくれる風景や思いを次世代に引き継ぐことこそが、真なる〈跨境〉を可能にしてくれるはずだ。そのときはじめて、東アジアは「領土」という境界幻想から自由になり、東アジアの平和を築けるのではないだろうか。そしてその作業は、歴史や社会学の資料からは容易に見えてこない、「文学」やその研究の言葉にこそできることと思うのである。

朴裕河 Yuha PARK

(韓国)世宗大学日語日文学科。教授。日本近代文学、韓日歴史認識等。「東アジア歴史和解の可能性をさぐる：帝国と冷戦を超えて」(東京：『Cosmopolis(コスモポリス)』第7号、2013)、「『引揚げ文学』に耳を傾ける」(京都：『立命館言語文化研究』24、2013)、『제국의 위안부, 식민지 지배와 기억의 투쟁(서울：뿌리와 이파리, 2013)』、『내셔널 아이덴티티와 젠더－나쓰메 소세키로 읽는 근대』(서울：문학동네, 2011) など。